

『クードルーン』に見られる縮約形 その2 — その他の語の縮約形 —

武 市 修

はじめに

前稿では『クードルーン』における動詞 *sagen* と *lâzen* の本来の形と縮約形との用法の違いを、『ニーベルンゲンの歌』と比較して調べてみた。その結果、中高ドイツ語文学の英雄叙事詩というジャンルを代表し、成立した文化圏もほぼ共通していると見られる両者には共通点が多いが、*sagen* の本来の過去分詞による押韻の有無、*lâzen* での押韻の有無あるいは *lâzet* とその縮約形 *lât* の使い分け、*lâzen*, *lân* の過去分詞の動詞と助動詞の使い方などに微妙な用法の違いのあることが明らかになった。本稿では引き続き『クードルーン』を中心に、その他の動詞と「乙女」を意味する名詞 *maget* を取り上げ、同様の視点から『ニーベルンゲンの歌』以外の作品とも比べて『クードルーン』の用法上の特徴を明らかにしたい。

1. *legen* と *ligen*

legen は他の叙事作品では、縮約可能な形¹ではほとんど縮約形で表われている。例えば『ニーベルンゲンの歌』では22例中20度(押韻は1例もなし)、『イーヴァイン』では35例すべて(うち押韻は過去分詞 *geleit* で26度と単数過去形 *leite* で2度)、『パルツィヴァール』では52例中42度(押韻は過去分詞 *geleit* で7度と3人称単数 *leit* で2度)、『トリスタン』では

1 本来縮約可能なのは2人称、3人称単数の直説法現在形と過去形、複数過去形、すべての人称の接続法過去形、1人称の直説法、接続法の過去形および過去分詞形である。しかし *du* に対する人称形は不思議なことに、我々の考察の対象である6作品には1例も現われていない。武市修『中世ドイツ叙事文学の表現形式』、近代文芸社、2006年、171ページ参照。

実に189例中187度を数える(押韻は過去分詞 *geleit* が111例中109度、人称形で76例中23度)。『イタリアの客人』では動詞 *legen* の用例そのものが少ないが、それでも当該形は8例中7度が縮約形(押韻は *leit* で2度のみ)である²。これらの作品と比べて、*legen* に関しては『クードルーン』はまったく異なった傾向を示している。この動詞そのものの用例が全部で9例³しかない上、その中で縮約可能な形も6例すべてが本来の語形で表われて一度も短縮形が見られない。そしてそれらはすべて行中に現われ、それぞれその形で行のリズムを整えている。先ず、縮約形の方がリズムの上で滑らかになるのにそうっておらず、本来の形が用いられている個所から見よう。

(1) *die legete man besunder.* (Kudr. 913, 4a)

x | ∪ ∪ x | x̄ x | ∪ | x̄ ^ |

彼ら [= 戦死者たちの死骸] を

(キリスト教徒と異教徒に)分けて埋葬した。

ここでは行の下に韻律を示したように *legete* の部分のタクトが分割揚音である。これがもし縮約形 *leite* であれば、強弱交代のリズムになるにもかかわらずそうっていないということから、この作品では *legen* に関しては縮約形が意図的に使われないと見てよいだろう。もちろん *legete* の形でも韻律上は許容範囲であり何ら問題はないが、他の複数5例では次の例に挙げられているように末尾の弱音 *-e* が省かれた *legten* 形であるので、ここもそれに合わせて *legte* 形にすれば *leite* と同じく強弱交代のリズムになるので、その方がよいのではないだろうか⁴。

2 Vgl. Takeichi, Osamu: *Zum Gebrauch der kontrahierten Formen der Verben legen und ligen in der mittelhochdeutschen Epik – unter besonderer Berücksichtigung der gebundenen Dichtung* – . In: *Sprachwissenschaft* Bd. 30, Heft 3, 2005, S. 297.

3 不定形 *legen* が1例(1006, 3)、接続法現在形 *legen* が1例(1379, 4)、*ir* に対する命令形 *leget* が1例(893, 1)の他に、縮約可能な形としては3人称単数直説法過去形 *legete* が1例(913, 4)と3人称複数直説法過去形 *legten* が5例(1193, 1. 1334, 1. 1348, 2. 1348, 4. 1354, 1)である。

4 Vgl. Franz H. Bäuml (Hg.): *KUDRUN Die Handschrift*. Berlin: Walter de Gruyter &

- (2) Von ir si dô giengen. si legten von in naz

| ˘ x | ˘ x | ˘ | ˘ ^ | x | ˘ x | ˘ x | ˘ ^ |

die wât die si truogen; man solte ir phlegen baz. (1193, 1-2)

彼女たちは彼女 [=ゲールリント]のもとから立ち去った。彼女たちは身に付けていた濡れた衣服を脱いだ。

彼女たちはもっとよい扱いを受けて当然であっただろうに。

- (3) Wate der bat swîgen daz here über al,

daz si sich sanfte legten den griez hin ze tal. (1348, 1-2)

x | ˘ x | ˘ x | ˘ | ˘ ^ | x | ˘ | ˘ | ˘ x | ˘ ^ |

ヴァテは全軍の者に物音を立てないようにして、

浜辺の砂の上に静かに身を横たえるように命じた。

例(2)では legten で他の3例と同じく強弱2音節のタクトを示しているが、例(3)では同じ形で、前行末の *Kadenz* (行の最後の主強音からあとの行末までの部分) が2音節の *klingend* になっている。この個所について F. H. Bäuml が何も触れていないところからすると、他の編者もそれに従っているのであろう。ところで、例(3)の1行目の *bat* は動詞 *biten* の3人称単数直説法過去形であるが、4格の目的語 (*daz here*) の他に不定詞 (*swîgen*) と *daz* 文を並行してとっている。これは一種の構文転換 (*Konstruktionswechsel*) であり、中高ドイツ語では他に命令文と *suln* を用いた要求文、接続詞のない副文と *daz* に導かれる文、直接説話の文と間接説話の文などの交代がよく見られる⁵。

Co. 1969, S. 301.『クードルーン』については写本がアンブラース英雄本に収められたものしかなく、テクストクリティクがきわめて困難である。しかしそれに反比例するように多くの学者によってテクストが編まれている。F. H. Bäuml は自らもテクストを編集しつつ、21人の他の編者による刊本の異同を詳しく挙げている。F. H. Bäuml によれば A. J. Vollmer, L. Ettmüller, E. Martin, E. Sievers は *legte* 形を採用している。K. Bartsch も初版ではこの形にしていたが、第2版以降は *legete* に代え、K. Stackmann はそれを踏襲している。Bäuml 自身は過去形の語尾 *-e* を省いて *leget* としている。いずれにしても縮約形はどの版にも現れていない。

5 Vgl. Paul/Mitzka: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Max Niemeyer Verlag 1966, § 394.

次に *ligen* について見てみよう。この動詞の縮約は 2 人称および 3 人称単数直説法現在形にのみ可能である⁶。これらふたつの人称形も他の作品では『ニーベルンゲンの歌』で 19 例(うち押韻が 6 度)すべて、『イーヴァイン』で 11 例(うち押韻が 6 度)すべて、『トリスタン』でも 42 例中 39 度(うち押韻が 19 度)と、ほとんどが縮約形である。『イタリアの客人』ではもっとも多く 51 例すべて縮約形で、しかも押韻に 45 度も用いられていて、この点で他の作品と大きく異なっている。これに対して『パルツィヴァール』では *lît* 19 例(うち押韻は 1 度のみ)と並んで 3 人称単数形 *ligt* が 7 度すべて行末に現われ、押韻に関してまったく違った特徴を示している⁷。それでは本稿の考察の対象である『クードルーン』ではどうだろうか。ここには当該形はすべて 3 人称単数で 10 例見られ、そのうち 1 例のみ本来の形 *liget* で、あとの 9 例は縮約形 *lît* (うち 1 例のみ押韻)である。従って *legen* とは異なり、*ligen* に関しては他の作品とほぼ同じ用法であると言えることができる。*lît* の 3 例と *liget* の例を挙げてみよう。

- (4) *sehet waz hie lît / unser guoten recken.* (718, 2b-3a)

|*ǣ x* | *ǣ x* | *ǣ ^* | |*ǣ x* | *ǣ x* | *ˊ* | *ǣ ^* |

見るがいい、我が方の立派な勇士たちの何と多くが

ここで死んで横たわっていることか。

- (5) *alsô sprach der degen Fruote: „unser lant lît verren.*

x x | *ǣ x* | *ǣ x* | *ˊ* | *ǣ ^* | *ǣ x* | *ǣ x* | *ˊ* | *ǣ ^* |

wir sîn koufliute und haben in dem scheffe rîche herren.“ (294, 3-4)

勇士フルオテはこう言った、『我々の国は遠方にあります。

我々は商人で、船に富貴な殿方を運んできております。』

- (6) *mir hânt dîne friunde getân sô manigiu leit*

ze Garadîe dem lande, daz lît in gar ze nâhen. (130, 2-3)

x | *ǣ x* | *ǣ x* | *ˊ* | *ǣ ^* | *x* | *ǣ x* | *ǣ x* | *ˊ* | *ǣ ^* |

お前の身内の者たちがこのわたしに、彼らの国のすぐ近くにある

6 *ligen* についても *du* に対する人称形は極端に少なく、6 作品の中では『ニーベルンゲンの歌』にわずか 2 例縮約形の *list* が用いられるのみである。

7 Vgl. Takeichi, Osamu, a. a. O., S. 305.

ガラディーエの国でまことに多くの苦しみを与えたのだ。

- (7) ein lant, daz liget wîten, daz heizet Hegelingen: (1231, 3)

x | ẋ x | ẋ x | ˘ | ẋ ^ | x | ẋ x | ẋ x | ˘ | ẋ ^ |

遠くにある国で、それはヘゲリンゲンと申します。

(4)は縮約形 *lit* で押韻している唯一の例であり、前行の *zît* と韻を踏んでいる。ちなみに、他の作品でも *zît* が *lit* の押韻相手になっているのは『ニーベルンゲンの歌』で *gelit* 1 例を含め押韻 5 例中 3 度⁸、『イーヴァイン』で 6 例中 5 度、『トリスタン』で 19 例中 15 度、さらに『イタリアの客人』でも *lit* 45 例中 34 度と *zît* が圧倒的に多い。

(5)は *lit* が行中に現われる 9 例のうちで唯一弱音の位置に置かれた例であり、ふつうは(6)のように *lit* は強音の位置に現われる。押韻は当時の宮廷文学では絶対必要条件であり、詩人たちは韻律規則上、言語上許される範囲内でさまざまな可能性を駆使して行の流れを滑らかにし、行末を 2 行ずつ協和させたのである。『クードルーン』ではとくに固有名詞のつづり方の多様性に特徴があり、例(6)の *Garadîe* に関して見ると、この形は 8 度行中に置かれて上のようにリズムを整えているのに対し、押韻する必要のある場合は *Garadê*, *Garadîne* さらに G と K が交代した *Karadê*, *Karadie* などの語形が用いられている⁹。(7)はリズムの関係で本来の形が現われている唯一の例である。ここは縮約形であれば強音が 3 つ続くことになり、行の流れが悪くなるため止む無くこの形が用いられたのであろう。他の編者もこの語形を採っているのに、H. F. Bäuml だけ *ligt* 形にしているが、そうすると強音が 3 つ続きぎごちなくなる。

動詞 *sagen*、*lâzen*、*legen*、*ligen* が一部の例外を除き¹⁰、ほぼどの作品でも、縮約形と本来の形がリズムを整え押韻するのに巧みに使い分けられていることをこれまでいくつかの論考で考察したが、縮約形がそれほど一般的でない動詞の例を次に検証していこう。

8 ただしここでは単一語の *zît* でなく 3 例とも *hôchgezît* である。

9 詳しくは武市修 前掲書 286～298 ページ参照。

10 例えば、『パルツィヴァール』では *sagen* の縮約形がわずか 4 例のみと極端に少ない。

2. その他の動詞の縮約形

縮約とは、狭義には「アクセントのある音節が有声の閉鎖音および摩擦音を超えて収縮し」¹¹、複数の音節の組み合わせが短縮されてひとつの音節になる現象のことである。縮約にはさまざまなパターンがあるが、古高ドイツ語の有声閉鎖子音 -g- が -egi-, -igi- の組み合わせで -j- 音に口蓋化して -egi- が -ei- に、-igi- が -î- になり、-ibi-, -idi- の組み合わせでは文中のアクセントが弱い個所で -î- に収縮した。これらの縮約形は12世紀中葉、宮廷騎士文学の中で広がり始め、脚韻に、また詩行を整えるのに利用された。それにつれて本来は縮約が起こらないはずの音韻の組み合わせにも短縮形が用いられるようになり、とくにオーストリア、バイエルン地方の文化圏でそれが顕著であった。

古高ドイツ語では弱変化第3類に属する *klagen* も本来は縮約が可能ではない動詞である。ところが『ニーベルンゲンの歌』にはこの動詞の3人称単数形 *klagete* 5例および *klagte* 1例と並んで、押韻するために過去分詞 *gekleit* 4例、さらに *ir* に対する人称形で本来の形 *klaget* 4例の他に縮約形 *kleit* が1例見られる。『イタリアの客人』にもこの動詞の過去分詞に1例(5589)と3人称単数3例に縮約形があり、しかもこの *kleit* はそのうち2度押韻のためでなく行中に現われている¹²。『クードルーン』にも過去分詞に1例だけ縮約形が現われ、押韻に利用されている。これらの事情については一部紹介したことがあるが¹³、*ir* に対する例と『クードルーン』の1例を次に示しておこう。

- (8) *Dô sprach der grimme Hagene: „Jane weiz ich, waz ir kleit.
ez hât nu allez ende unser sorge unt unser leit. (Nib. 993, 1-2)*
その時獯猛なハゲネが言った。

11 Besch, Werner / Knoop, Ulrich / Putschke, Wolfgang / Wiegand, Herbert Ernst (Hg.): *Dialektologie. Ein Handbuch zur deutschen und allgemeinen Dialektforschung*. Berlin / New York: de Gruyter 1983, S. 1147.

12 7024は行末であるが、3324と12379は行中に置かれている。

13 武市修 前掲書277～279ページ参照。

『なぜお嘆きになるのか私には分かりません。

我々の心配と我々の苦しみが今すべて終わったというのに。

(9) ez mac si alle riuwen – gote sî ez gekleit – ,

die mit Kûdrûnen kômen her ze lande; (Kudr. 1060, 2-3)

神様に訴えます。クードルーン様とご一緒にこの国に来た者は
みんな悲しい気持ちにさせられるのは当然のことです。

それぞれの作品の編者が注で述べている¹⁴ことから、これら当該の形が klagen の縮約形であることは明らかである。例(8)では本来は縮約形があり得ない ir に対して押韻のため止むを得ずこの形を用いたもので、主要3写本とも kleit である。『クードルーン』の例は受動の要求話法の文で、直訳すれば「そのことが神に対して嘆かれてあれ」という意味である。この gekleit の押韻相手は maget の縮約形 meit であるが、本来の形である maget : geklaget でも韻律上何の問題もないし、klagen は他の個所では縮約可能な形としては klagete が13例、klageten が5例、kлагten が3例、ir に対する klagetet が1例とすべて本来の形であるのに、ここだけ縮約形になっている¹⁵。F. H. Bäuml の一覧に他の刊本の異同がまったく挙げられていないところからすれば、明らかに写本がこうなっているのであろう。このことはのちに meit のところでもう一度触れることになる。

次に動詞 schaden の縮約形について見よう。『クードルーン』にこの動詞は前つづり ge- の付いた不定詞 geschaden が1度(1109, 4)、過去分詞形 geschadet が1度(1032, 2)、3人称単数形が6度¹⁶以外に、次のように ich に対する接続法過去形としてただ1度縮約形が現われている。

(10) ob ich in gerne schatte, wie möchte daz ergân? (837, 2)

x | x̃ x | x̃ x | ˘ | x̃ ^ | x | x̃ x | x̃ x | x̃ ^ |

できれば彼らを痛い目に遭わせたいのだが、

14 Vgl. Anm. von H. de Boor zu *Nib.* 991, 3 und Anm. von K. Stackmann zu *Kudr.* 1060, 2.

15 これらの klagen の人称形はすべて行中に現われている。

16 現在形が schadet 1例(1139, 3)、過去形が schadet 1例(1399, 4)の他に前つづり ge- の付いた geschadete で4度(128, 2. 803, 4. 1094, 2. 1410, 2)である。

どうすればできることやら。

この *schatte* は注で *schadete* の縮約形だと説明されている¹⁷。しかしなぜここだけこの形なのか、写本の関係が分からないので比較しようがないが、F. H. Bäuml によれば A. J. Vollmer と L. Ettmüller の二人は本来の形を採っている¹⁸。*schadete* であれば、この前行の終わりのカデンツは、2 音節の *klingend* から | x x | x ^ | と 3 音節の *klingend* に変わるだけで韻律上問題はない。もっとも *schadete* の縮約形に *schatte* という形がないわけではなく、辞書にも Walther その他の用例個所が挙げられている¹⁹。

他の作品では『イタリアの客人』以外そもそもこの動詞の用例はきわめて少なく、『ニーベルンゲンの歌』では皆無、『イーヴァイン』では *geschaden* 3 例を含む不定詞 4 例以外に 3 人称単数 *schadet* が 1 例のみ、『トリスタン』と『パルツィヴァール』には *schadet* がそれぞれ 2 例のみである。これらに比べて『イタリアの客人』ではこの動詞は多様に用いられ、3 人称単数形に限って見ても、本来の形 *schadet* が行中に 8 度²⁰ 以外に、韻律上 1 音節が適切な個所では 6 度²¹ 縮約形 *schât* が行中に、さらに行末で押韻の必要なところでは別の縮約形 *scheit* が 5 度²² 用いられている。辞書には *schaden* の縮約形として *schât* と *schatte* は挙げられているが²³、

17 Vgl. Anm. zu 837, 2.

18 Vgl. Franz H. Bäuml (Hg.), a. a. O., S. 278.

19 Vgl. BMZ, II², 64b, 34ff.

20 556. 3102. 4815. 5140. 5172. 5980. 6569. 14193.

21 2189. 5159. 5186. 6672. 7630. 13774.

22 871. 1740. 2102. 5166. 8150. *scheit* は行中にも 2 度(4968と11688)現われ、前つづり *ge-* の付いた *gescheit* も 1 度(12930)押韻に用いられており、さらに次のように複数過去にも 1 例縮約形が見られ、同じく *entsagen* の複数過去の縮約形 *entseiten* と押韻している(武市修 前掲書233-4ページより)。

der entseit got vil gar / der meineide wirt, daz ist wâr, /

als ouch die zwêne entseiten, / die niemen wan in selben scheiten. (11995-98)

これは真の事であるが、偽証する者は、自分自身以外の他の誰をも害したのではないあの二人が神に背いたのと同じように、すっかり神に背くことになる。

23 Vgl. BMZ, II², 64b, 29ff.

scheit はない。しかし前後のコンテキストからこれらの scheit は明らかに schaden の縮約形である。参考にその 1 例を示しておこう。

- (11) sô ist daz wâr daz man seit
daz niemen wan im selben scheit: (W. Gast 5165-66)
だから誰も自分以外の人を害することにならないと
人が言うのは本当のことだ。

ここでは sagen の 3 人称単数現在形 saget の縮約形 seit と韻を踏むためこの形になっている。この作品には sagen の当該形は141例中132度、実に93.6%も縮約形が用いられている²⁴が、他に vrâgen, jagen, gebaden, phlegen, gesigen などにも短縮形が現われ押韻に利用されている。しかしこれらについてはこれ以上立ち入らず、稿を改めて紹介したい。

次に同じく弱変化動詞 verdagen を取り上げよう。この動詞は不定詞として5度²⁵現われ、そのうち4度押韻に利用されている他に、過去分詞が2度縮約形で、これも行末に置かれている。その2例を検討しよう。

- (12) Ludewîc der alte ze Hartmuoten reit.
des er willen hête, des wart in niht verdeit. (589, 1-2)
老王ルデヴィークはハルトムオトのところへ行った。
彼が望んでいることは息子に言われずにはおかれなかった。
- (13) Dô sprach diu Hilden tohter: „mir ist unmâzen leit:
des ich dâ wolte frâgen, daz ist mich verdeit. (1178, 1-2)
そこでヒルデの娘は言った、『私は悲しくてたまりません。
私の尋ねたかったことがまだ私に話されていないのですもの。』

この2例の verdagen はまったく同じ構文である。つまりここでは人の4格と事柄の4格をとる他動詞で、受動文になって事柄が1格の主語に

24 武市修 前掲書236ページ参照。

25 820, 1(: klagen). 925, 1(: erslagen). 1336, 2(: sagen). 1337, 2(: gesagen)と767, 4である。

移行し、人の4格は受動文でもそのままになっている。どちらの文も前行の関係文を後行の主文において中性の指示代名詞2格 *des* および1格 *daz* で受け直されている。(12)ではこの *des* が部分の2格として *niht* にかかり、*niht* が1格の主語になっており、(13)では *daz* が主語である。

verdagen についても他の作品の用例を調べてみると、『ニーベルンゲンの歌』は『クードルーン』と同じ傾向を示し、不定詞10例がすべて行末に、過去分詞が *verdaget* 形で2度²⁶、縮約形 *verdeit* で6度²⁷ いずれも受動文の行末で押韻に用いられている。ところが、我々が考察の対象としている他の4作品には縮約形は1例も見られない。『トリスタン』にはそれどころかこの動詞はいずれの形でもまったく現われず、同じ意味で *verswîgen* が8度用いられている。

verdagen はしかし『クードルーン』の1例(767, 4)以外は不思議なことにどの形でも、用いられているすべての作品のすべての個所で行末に置かれ押韻に利用されている²⁸。他の弱変化動詞では多くの縮約形が現われる『イタリアの客人』にも不定詞 *verdagen* 3例(581. 1627. 8176)と3人称単数接続法現在が1例(548)のみで *verdeit* 形はなく、同じ意味の *verswîgen* も4度と用例が少ない。ちなみにこのふたつの動詞がどちらも現われる個所があるので、参考にそれを示してみよう。

- (14) *tuo niemen leit mit dînem sagen,*
verswîc daz man sol verdagen. (W. Gast 8175-76)
 お前のおしゃべりで誰をも苦しめるな。
 黙っているべきことは言わないでおけ。

26 536, 1(: *maget*)と1643, 3(: *gesaget*). これらについては後にまた触れることになる。

27 形容詞 *gemeit* と3度(371, 1. 1673, 3. 1713, 2)、名詞の *kleit* と2度(773, 1. 1367, 3)、形容詞 *leit* と1度(725, 1)の6度である。

28 『イーヴァイン』では不定詞が2例の他に *du* に対する *verdagest* 1例、3人称単数現在と過去分詞に *verdaget* が1例ずつ、3人称単数過去 *verdagete* が1例である。『パルツィヴァール』では不定詞が *verdagen* と *verdagn* 3例ずつ、*ich* に対する *verdage* が1例、3人称複数過去 *verdageten* が1例および過去分詞 *verdagt* が4例であり、同じ意味の *verswîgen* もさまざまな形で19度用いられている。

3. 名詞 *maget* とその縮約形

3.1. 『クードルーン』以外の作品に見られる *maget*

さて、これまで前稿から続けて『クードルーン』に現われる動詞の縮約形を他の叙事作品とも部分的に比較しながら検証してきたのであるが、次にこの作品に数え切れないほど多く現われる「乙女」を意味する名詞 *maget* とその縮約形について、ここで用いられている用法の特徴を明らかにしたい。この語はゴート語の *magaþs* に由来し、古高ドイツ語では *magad* となり、2格は *magadi* であった²⁹。中高ドイツ語では末尾母音が弱化、同時に末尾子音が硬化して *maget* となり、2格形は *magede* と並んでウムラウトした *mege* もある。これらが縮約した *meit*, *meide* は12世紀にはもうすでに用いられていたようである。他に縮小形として *mageîn*、稀にその縮約形 *meidîn*, *d* と *t* が交代した *magetîn* などたくさんの語形がある。この語の用法に関して『クードルーン』が如何に独特であるかを示すため、先ず他の作品の使用状況から紹介しよう。

『ニーベルンゲンの歌』では本来の形と縮約形が押韻に関して明らかに使い分けられている。*maget* が29例³⁰ 中3度に対し、その縮約形 *meit* は56例³¹ 中55度行末に置かれている。先ず *maget* が行末で押韻している3例と、その関連から *verdaget* のもう1例から見ていこう。

(15) Nu enbietet, swaz ir wellet; des wirt niht verdaget.

ich wil iz werben gerne durch die vil schœnen maget.

さあ、お伝えになりたいことを言って下さい。(Nib. 536, 1-2)

それはすべてお伝えしましょう。

あの美しい姫のために喜んでその勤めを果たしましょう。

29 BMZ, II¹, 1b, 6ff. u. 3b, 6ff.; Anm. von P. Piper zu Nib. 2, 1.

30 コンコーダンスには27箇所挙げられているが、そこで *meit* 形に分類されている27, 2と *magt* の項に入れられている547, 4が我々のテキストでは *maget* となっているので、合計29箇所になる。

31 コンコーダンスには58箇所挙げられているが、そのうち1例(2208, 4)は動詞 *mîden* の過去形であり、もう1例(27, 2)は上の注で示したように、*maget* であるので、差し引き56箇所となる。

- (16) diu mære, diu er brâhte, wurden niht verdaget
den wirt unt sîne friunde; ez wart in schiere gesaget. (1643, 3-4)
彼がもたらしたこの話は城主とその親しい者たちに
隠されてはいなかった。彼らにすぐさまそのことが話された。
- (17) Mit gewalte niemen erwerben mac die maget“,
sô sprach der künec Sigmunt, „daz ist mir wol gesaget. (57, 1-2)
誰も力づくでその姫を手に入れることはできない」
王ジグムントはこう言った、「わしは確かな筋から聞いている。
- (18) Der schilt was under buckeln, als uns daz ist gesaget,
wol drîer spannen dicke, den solde tragen diu maget, (437, 1-2)
伝えるところによれば、この乙女が持つことになる
楯は中高の部分の厚みが優に3指尺もあったという。

例(15)の組み合わせについて見ると、先述のように *meit* は56例中55度行末にあり、*verdaget* もここと(16)の2例以外は同じく行末で6例縮約形 *verdeit* であるし、*sagen* の過去分詞も縮約形52例はすべて押韻に用いられているのだから、当然ここも *verdeit* : *meit* および *verdeit* : *geseit* の組み合わせの方が適切ではないかと思われそうである。ところが写本では(15)はAが *verdaget* : *maget*、Bが *verdaget* : *meit*、Cは別の表現で *verdaget* : *gesaget* であり、(16)もAとBが *verdaget* : *gesaget*、Cがここも別の表現で *vernomen* : *genomen* となっている。*verdeit* 6例の押韻相手を調べると形容詞 *gemeit* が3度、名詞 *kleit* が2度、形容詞 *leit* が1度というように、いずれも縮約形がない語ばかりである。*verdagen* に関しては確かに数の上では縮約形が3倍も多いが、それは押韻上止むを得ない場合ばかりである。これらの用語法から見て『ニーベルンゲンの歌』の詩人ないしは筆写生たちは、*verdagen* に関しては本来の形と縮約形の両方選択の余地のある場合には本来の形を選んでいるようである。

(17)と(18)も *geseit* : *meit* で韻律上何の問題もないのにそうっていない。例(17)の *maget* : *gesaget* はA写本から採られており、Bでは *magt* : *gesagt*、Cでは *meit* : *geseit* であり、例(18)の *gesaget* : *maget* はB写本に拠り、ここはA、Cでは *geseit* : *meit* である。しかしB写本にもこの組み合わせがないわけではなく、70, 1-2では3写本とも *meit* : *geseit* となっている。

これらの調査結果からすれば、テキストの統一性という観点から(17)、(18)では縮約形の組み合わせを採る方がよいと言える³²。

次に縮約形 *meit* が行中に現われる唯一の用例を見よう。

- (19) *dô fuort' diu kûneginne vil manige meit wol getân*, (1293, 4)

x | ẋ x | ẋ x | ˘ | ẋ ^ | x | ˘ ˘ x | ˘ | ẋ x | ẋ ^ |

王妃 [= クリエムヒルト] は多くの美しい乙女らを連れて行った。

ここは縮約形 *meit* でなく本来の *maget* であれば2音節になるので、この部分は強弱のタクトに読むことができ、リズムはの方が滑らかになるにもかかわらずそうっていない。写本では A、B がこの縮約形であり、C は *magt* なので、主として C に基づく F. Zarncke と U. Hennig の版では *magt* 形が採られている。我々のテキストは B 写本を重視しているので、それに従っているが、必ずしもすべての個所でそうという訳ではない³³ ので、テキスト校訂上の一貫性から、ここは先の2例とは逆に *maget* 形の方がいいのではないだろうか。ちなみに、C 写本の系統に連なる、15世紀に成立したと見られる a 写本では *maget* となっている³⁴。

我々の版の『ニーベルンゲンの歌』にはこの語は他に行中で *magt* 2例、*magede* と *mägeden* が1例ずつ、*meide* が6例、*meiden* が2例あり、さらに *maget* の縮小形 *magedîn* が19例中18度行末に用いられている³⁵。*mägeden* と行中の *magedîn* について見よう。

- (20) *er'nbôt ez frouwen Uoten und ir tochter wolgetân*,

daz si mit ir mägeden hin ze hove solden gân. (275, 3-4)

彼は母后ウオテと彼女の美しい娘 [= クリエムヒルト] に

32 H. Brackert は彼の版で57, 1-2を縮約形に代えたが、それなら437, 1-2も同じように変更すべきであろう。

33 武市修 前掲書209ページ参照。

34 Vgl. U. Hennig (Hg.): *Das Nibelungenlied*. S. 205.

35 P. Piper によれば、この縮小形は宮廷文学では稀だということであるが、我々の考察の対象であるふたつの代表的な英雄叙事詩では押韻に多用されている。

侍女たちを引き連れて宮廷に来るようにと伝えさせた。

- (21) und saget ez iuvern magedîn, die ir dâ fûeren welt. (1267, 3)

そしてあなたが連れて行きたい侍女たちに

その旨お伝えください。

(20) の māgeden は写本では A が縮約形 meiden, B が mageden, C が megeden である。我々の版は C に拠り、それを今日のウムラウト形で表わしたものである。しかしここだけウムラウト形にするのは不自然であり、Bartsch / de Boor に拠った H. Brackert もここは B 写本に従い mageden に代えており、それは適切な変更であろう。C に基づいた二人の版では写本どおり megeden が採られている。

(21) の magedîn は B 写本に従っており、これもそれ自体は問題ない。しかし magedîn は他の個所はすべて押韻に用いられ、ここは A 写本では magden、C 写本では māgeden であり、これもテキストの統一性からすれば A 写本の magden を採った方がよいかもしれない。

『イーヴァイン』にはこの語の縮約形は 1 例もなく、maget 36 例中 25 度押韻の他は māgede が 1 度だけである。これを見てみよう。

- (22) er muoz in älliu jâr geben / drîzec māgede dâ her /

x | x̣ x | x̣ x | ˘ | ˘ ˘ ^ | | x̣ x | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

die wîle sî lebent und er. (Iw. 6366-68)

彼は彼らに毎年、彼らと彼が生きている限り 30 人の

乙女を差し出さねばならないのです。

第 6 版までは älliu が elliu, māgede が māge であったのを L. Wolff は第 7 版で上のように改めた。māgede の方が強弱交代のタクトになり流れが滑らかであり、Th. Cramer も M. Wehrli もこれに従っている。なお、ウムラウトの表記はこの作品では他の語にもしばしば見られる。

『トリスタン』にも、動詞 mîden の単数過去 meit は 2 例あるものの、maget の縮約形はまったく見られず、maget が 47 例中 21 度押韻し、他に mege が 7 度行中に現われるのみである。

『パルツィヴァール』では maget が 42 例で 2 度、それぞれ verklaget と

gesaget を相手に押韻する他、末尾の -e が省かれた magt が90例中約半数の43度 gesagt, geklagt などさまざまな語と行末で韻を踏んでいる。末尾の -e の有無についてはこの作品では他の語にも見られるように、決まった原則はないようである。他に単数2格、3格および複数形に magede が7度、magde が3度、magden が1度いずれも行中に見られる。

宮廷叙事詩では縮約形 meit は稀にしか現われないということであるが、この作品には我々の版では maget の縮約形として1格、4格の meit は1例もない³⁶のに、単数2格、3格および複数に meide が40度、複数3格に meiden が2度見られる。そしてそれらはすべて行中に置かれている。ただしこれらの縮約形は K. Lachmann によって編まれたテキストにのみ採られたもので、Lachmann に従う E. Martin はすべてそれを踏襲しているのに対し、語形を統一する A. Leitzmann はすべての個所をそれぞれ megede と megeden に改めている³⁷。

『イタリアの客人』については、我々の考察の対象である6作品の中で縮約形をもっとも多く、また多様に利用していることがこれまでの検討結果から明らかになっているが、名詞 maget に関してはまったく逆の現象が見られる。つまり、ここではこの名詞はいかなる語形でも一度も用いられていない。まことに不思議なことである。

それでは最後に本稿の主要な考察の対象である『クードルーン』における maget について詳しく分析していこう。

3.2. 『クードルーン』に現われる maget

この作品には maget とその何らかの別形は全部で240度現われる。その中で縮小形 magedîn, magetîn を除き、2格、3格で語尾が付いたりウムラウトした形も含め maget の本来の形と縮約形は『ニーベルンゲンの歌』と同様、押韻に関してははっきりと使い分けられている。先ず maget から見ていこう。

36 動詞 mîden の単数過去としては11例ある。

37 K. Bartsch も縮約形をすべて本来の語形に置き換えているが、ただし末尾の弱音 -e に関しては統一しておらず、40個所の meide のうち、29個所は megede, 11個所は megde としている。

- (23) und diuhte ich in sô biderbe, sô wolte ich sie minnen
und wolte im immer lônên, der mir die maget hulfe gewinnen.“
x | ẋ x | ẋ x | ˘ | ẋ^ | x | ẋ x | ẋ x | ˘ | ẋ x | ˘ | ẋ^ |
彼が私を立派な男だと思ってくれば、 (227, 3-4)
彼女を妻にしたいものだ、
あの姫を得る手助けをしてくれる者にはたつぷり礼をしよう。』
- (24) Diu maget begunde frâgen: „wie was der genant?“ (415, 1)
x | ˘ ˘ x | ẋ x | ˘ | ẋ^ | | ẋ x | ẋ x | ẋ^ |
姫は尋ねた、『その方は何というお名前でしたか。』

例(23)の2行目の maget は強弱2音節でひとつのタクトを形成している。一方また、maget の ma- は短音の開音節なので、同じ maget の2音節で分割揚音として1音節分に相当するものとみなされ得る。(24)はその例である。maget は全部で92度現われ、すべて行中でこのようにリズムを整えるのに用いられ、そのうち18度は例(24)のように分割揚音となっている。

maget はその他に単数2格と3格、また3格以外の複数として本来の形に語尾がついた magede が8度、ウムラウトした megede が3度、さらに複数3格の mageden が2度の合計13度行中に現われる。

一方縮約形について見ると、1格および4格の meit が32例あり、そのうち30度行末に現われる。その押韻相手は herzenleit 2例(681, 1と1582, 1)を含め形容詞あるいは名詞の leit と15度³⁸、verseit 2例(775, 2と1632, 1)の他に sagen の過去分詞の縮約形 geseit と6度³⁹、名詞 arbeit と4度(14, 1. 16, 1. 618, 1. 1555, 1)、さらに動詞 strîten の直説法単数過去 streit(1413, 2)、名詞 kleit(1304, 1)および例(9)で見たように klagen の過去分詞の縮約形 gekleit と1度ずつである。meit が行中に用いられる2例を見てみよう。

- (25) Dô sprach diu frouwe Hildeburc, diu meit ûz Irlant: (1267, 1)

x | ẋ x | ẋ x | ẋ x | ẋ^ | x | ẋ x | ˘ | ẋ^ |

38 他に leit と345, 1. 625, 2. 690, 1. 979, 1. 989, 1. 996, 1. 1025, 2. 1208, 1. 1251, 1. 1252, 1. 1262, 1. 1317, 1. 1505, 1.

39 9, 2. 199, 1. 243, 1. 685, 1. 1246, 1. 1640, 2.

その時イルラントの姫君であった貴婦人ヒルデブルクが言った。

- (26) Dô umbeslôz ouch Hartmuot die meit ûz Irlant. (1650, 1)

その時ハルトムオトの方もイルラントの姫を抱きしめた。

F. H. Bäuml によれば⁴⁰ 例(25)では K. Müllenhoff の他に K. Bartsch も第4版まで maget 形にしていたのを第5版でこの縮約形に改め、K. Stackmann はそれを引き継いだのである。ここは maget にしても分割揚音になるだけで、韻律上問題はない。(26)の meit 形は E. Sievers が magt としている以外はすべてこの縮約形を採っているようである。この2個所はおそらく写本がこの形を示しているのであろう。しかし他の30個所では meit は行末に置かれ、例(9)で見たように、他には縮約形を用いない動詞 klagen の過去分詞が maget : geklaget で韻律上何も問題ないのにそこだけ縮約形にして meit と押韻させているということから、maget は明らかに行末では縮約形にして、行中では maget を用いるように意識的に区別していると言うことができる。さらにテキストの一貫性からしても、この2個所は maget を採る方がいいかもしれない。

縮約形にも本来の形 maget と同様1格と4格の meit 以外に単数の2格、3格およびすべての格の複数に語尾の付いた形があり、しかもこの作品にはそれらが本来の形よりずっと多く meide が44例、複数3格の meiden が16例見られ、そのうちそれぞれ9度⁴¹と3度⁴²押韻に用いられている。1例だけ挙げておこう。

- (27) daz si der jungen meide und des kindelînes niht ensâhen. (53, 4)

それで彼らはその乙女をも幼い王子をも見られなかった。

40 Vgl. F. H. Bäuml, S. 404.

41 この場合押韻相手は2例(1488, 3と1490, 4)が動詞 scheiden の接続法現在 scheide であり、7例が herzenleide 1例(801, 3)を含め leide である。この leide は名詞の複数2格1例(627, 3)以外は上の herzenleide も含めすべて(445, 4. 510, 4. 881, 4. 1152, 4. 1198, 4)副詞である。herze[n]leide は一見すると名詞の複数のようであるが、ここは副詞で、他に例えば Nib. 2372, 4にも見られる。

42 beiden (1532, 3), scheiden (1554, 4)と副詞 leide (1702, 3).

この *meide* について脚注で *maget* の単数 2 格で *magede* の代わりであると説明されている⁴³。これは *des kindelînes* と同様 *niht* にかかる部分の 2 格である。

さて、『ニーベルンゲンの歌』に *maget* の縮小形 *magedîn* が 19 例あり、そのうち 18 度押韻に用いられていることを先に見たが、『クードルーン』ではこれも 2 倍以上現われ、しかも *magedîn* 39 例(うち 36 度押韻)の他に *magetîn* 3 例(3 度とも押韻)、さらに 1 度だけだが、縮約形の縮小形 *meidîn* まである。これらの縮小形のいくつかを見ておこう。

(28) Hetele dô frâgte: „möhte daz gesîn,

| x̣ x | x̣ x | ˘ | x̣ ^ | | x̣ x | x̣ x | x̣ ^ |

daz mir ir vater gæbe daz schoene magedîn? (227, 1-2)

ヘテレはそこで尋ねた、『彼女の父親が私に

この美しい娘を与えることなどあり得ようか。

これは物語の前史、のちに主人公クードルーンの母親になるヒルデ姫の若かりし頃、その美しさに魅せられたヘテレが、彼女の恐ろしい父親ハゲネに反対されるのも覚悟の上で求婚しようと決心し、重臣ホーラントとフルオテに相談する場面であり、例(23)はこの続きである。

magedîn, *magetîn* の押韻相手は上の例のような前つづり *ge-* の付いた不定詞 *gesîn* 以外に、本来の不定詞 *sîn* がもっとも多く 19 回を数える⁴⁴。この *ge-* は注では強調のためとあるが、P. Piper も指摘しているように⁴⁵ 今日話法の助動詞といわれる助動詞と結びつくと、通常、不定詞にこの前つづりが付けられたが、その理由ははっきり分らない。いずれ

43 Vgl. *Kudrun*, Anm. zu 53, 4.

44 不定詞 *sîn* と 132, 2. 281, 2. 283, 2. 391, 1. 484, 1. 486, 1. 494, 2. 566, 1. 968, 2. 976, 1. 1005, 1. 1104, 2. 1153, 2. 1223, 1. 1225, 4. 1298, 2. 1311, 1. 1659, 2. 1700, 2. それ以外に所有代名詞の *sîn* と 406, 1. 468, 2. 1518, 1. 1564, 1 の 4 度、同じく *mîn* と 396, 1. 402, 1. 458, 2. 491, 1. 957, 1. 1249, 1. 1260, 2 の 7 度、*vogellîn* (381, 1), *Ortwîn* (1228, 2), *künigîn* (1540, 1), *Normandîn* (1630, 2), *vingerlîn* (1649, 1) とそれぞれ 1 例ずつである。*magetîn* は 963, 1. 1007, 2 で不定詞 *sîn* と、52, 1 で *kindelîn* と押韻している。

45 Anm. von P. Piper zu 227, 1.

にしてもここはこの前つづりが付いて、強弱交代のリズムが保たれている。

magedîn が行中に置かれる 3 例のうち次の個所は編者によって異同のあるところである。

- (29) der Kûdrûnen mâgen erbiten diu magedîn angestlîche. (1187, 4)

x | ˘ | x̣ x | ˘ | x̣ ^ | x | ˘ ˘ x | x̣ x | ˘ | x̣ x | ˘ | x̣ ^ |

乙女たちはクードルーンの身内の者たちの到着を不安げに待った。

K. Bartsch は第 4 版まで magedîn としていたのを第 5 版で magede に代えた。しかしそれを引き継いだ我々の版の編集者 K. Stackmann は元に戻したのである。P. Piper も magede 形を採り、さらに dô と vil を加えている。その方が次のようにリズムが滑らかになる。

der Kûdrûnen mâge erbiten di magede dô vil angestlîche.

x | ˘ | x̣ x | ˘ | x̣ ^ | x | ˘ ˘ x | ˘ ˘ x | x̣ x | x̣ x | ˘ | x̣ ^ |

最後に 1 例のみ見られる縮約形の短縮形を挙げてみよう。

- (30) Dô bidemten vor der kelte diu schoenen meidîn.

x | ˘ ˘ x | x̣ x | ˘ | x̣ ^ | x | ˘ | x̣ x | x̣ ^ |

dô sprach der fürste Herwîc: „möhte daz gesîn,

daz ez iuch minniclîchen diuhte niht ein schande,

ob ir, edele meide, unser mentel trüeget ûf dem sande?“ (1232, 1-4)

その時寒さのためにこの美しい娘たちは震えていた。

そこでヘルヴィーク王が言った、『もしもできることなら、

高貴な乙女らよ、愛らしいあなた方が恥ずかしいと思わないで、

この(寒い)浜辺で我々のマントを着てもらえないだろうか。』

ここは magedîn にすると後行が強弱交代の滑らかな流れになるのに、その形を採っているのは F. H. Bäuml によれば von der Hagen と E. Sievers

だけである。おそらく写本が *meidîn* なのであろう。ここも不定詞 *gesîn* と韻を踏んでいる。4行目の *meide* は複数1格の呼びかけである。

おわりに

以上、制約された条件のもととは言え、一応 *kritische Ausgabe* とみなされている刊本に基づいて、『クードルーン』に現われる縮約形の特徴を調べてきたのであるが、同じ文化圏で成立し、しかも英雄叙事詩という同じジャンルに属する『ニーベルンゲンの歌』とはおおむね同じ傾向を示していると言える。しかし、動詞 *legen* については1例も縮約形を用いないが、*schaden* では逆に1例ながらそれがこの作品に現われるなど、独自の用例も見られる。

『クードルーン』に何よりも特徴的な語は「乙女」を意味する *maget* である。この点で縮約形に関しては多数で多様な用例を示す『イタリアの客人』とまったく対極にある。これはおそらく両作品のジャンルの違いに起因していると考えられる。つまり、格言詩『イタリアの客人』では詩人は当時の社会的状況を批判的に分析し、宮廷騎士たちにキリスト教倫理に基づいた正しい振舞い方を指し示す。ここで批判の対象になるのはローマ教皇を頂点とするキリスト教の僧侶たちであり、神聖ローマ帝国の騎士たちである。これに対し英雄叙事詩に数えられる『クードルーン』の主人公は未婚の美しい王女であり、彼女の誕生までの前史、彼女をめぐる宮廷生活・求婚・誘拐・婚約者による奪還が描かれる。

同じジャンルの『ニーベルンゲンの歌』も主人公の一人がライン河畔ヴォルムスに宮廷を営むブルグント国の王グンテルの妹姫クリエムヒルトであるので、「乙女」という語は比較的によく用いられるが、ジーフリトと結婚した後は *vrouwe* となるので、『クードルーン』ほど多用されない。あとの宮廷叙事詩3作品はこれらの間に位置する。このように作品のジャンルの違いによって、用いられる語に大きな特徴があるということは興味深いことである。最後に6作品における *maget* の用例数と押韻数について一覧表に示し、この小論を閉じることにしよう。

『クードルーン』に見られる縮約形 その2

	Nib.	Kudr.	Iwein	Tristan	Parz.	W. Gast
maget	29(3)	92(0)	36(25)	47(21)	42(2)	
magt	2(0)				90(43)	
magede	1(0)	8(0)			7(0)	
magde					3(0)	
megede		3(0)		7(0)		
mägede			1(0)			
mageden		2(0)				
mägeden	1(0)					
magden					1(0)	
小計	33(3)	105(0)	37(25)	54(21)	143(45)	0
meit	56(55)	32(30)				
meide	6(0)	44(9)			40(0)	
meiden	2(0)	16(3)			2(0)	
小計	64(55)	92(42)	0	0	42(0)	0
magedîn	19(18)	39(36)				
magetîn		3(3)				
meidîn		1(1)				
合計	116(76)	240(82)	37(25)	54(21)	185(45)	0

テキスト

Gottfried von Strassburg: *Tristan*. Nach dem Text von Friedrich Ranke, neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2. durchgesehene Auflage, 3 Bände (Reclam Nr. 4471, 4472, 4473), Stuttgart 1981 (= Trist.)

Hartmann von Aue: *Iwein*. Hrsg. von G. F. Benecke und K. Lachmann, neubearbeitet von Ludwig Wolff, 7. Ausgabe, Bd. 1: Text, Berlin 1968 (= Iw.)

Kudrun. Hrsg. von Karl Bartsch. Neue ergänzte Ausgabe der fünften Auflage, überarbeitet und eingeleitet von Karl Stackmann, Wiesbaden 1980 (= Kudr.)

Das Nibelungenlied. Nach dem Text von K. Bartsch und H. de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert von S. Grosse, Stuttgart 1997 (= Nib.)

- Der Wälsche Gast des Thomasin von Zirclaria*. Hrsg. von Heinrich Rückert, mit einer Einleitung und Register von Friedrich Neumann, Berlin 1965 (= W. Gast)
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutscher Text nach der 6. Ausgabe von K. Lachmann, Übersetzung von P. Knecht, Einführung zum Text von Bernd Schirock, Berlin / New York 1998 (= Parz.)

主要参考文献

- Bäumli, Franz H. (Hrsg.): *KUDRUN Die Handschrift*. Berlin: Walter de Gruyter & Co. 1969
- Bäumli, F. M. / Fallone, E.-M.: *A Concordance to the NIBELUNGENLIED (Bartsch-De Boor Text)*, Leeds 1976
- Benecke, G. F., Müller, W., Zarncke, F.: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch* I-III; Reprografischer Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-66, Hildesheim 1963 [= BMZ]
- Besch, Werner / Knoop, Ulrich / Putschke, Wolfgang / Wiegand, Herbert Ernst (Hrsg.): *Dialektologie. Ein Handbuch zur deutschen und allgemeinen Dialektforschung*. Berlin / New York 1983
- Boggs, R. A.: *Hartmann von Aue Lemmatisierte Konkordanz zum Gesamtwerk*. Nendeln 1979 (Indices zur deutschen Literatur 12 / 13)
- Gottfried von Strassburg: *Tristan*. Hrsg. von R. Bechstein, 2 Bde. 5. Auflage, Leipzig 1930 (Deutsche Klassiker des Mittelalters 7)
- Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Nach der Ausgabe von R. Bechstein, hrsg. von Peter Ganz. 2 Bde. Wiesbaden 1978 (Deutsche Klassiker des Mittelalters, neue Folge 4)
- Hall, C. D.: *A complete Concordance to Gottfried von Strassburg's Tristan*, Lewiston / Queenston / Lampeter 1993
- Hall, C. D.: *A complete Concordance to Wolfram von Eschenbach's Parzival*. New York & London 1990
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der 7. Ausgabe von G. F. Benecke, K. Lachmann u. L. Wolff, Übersetzung u. Anmerkungen von Th. Cramer, Berlin 1974
- Hartmann von Aue: *Iwein*. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen, mit Anmerkungen und einem Nachwort versehen von M. Wehrli, Zürich 1988
- Hartmann von Aue: *Iwein. Der Ritter mit dem Löwen*. Hrsg. von E. Henrici, 2 Teile, Halle 1891 u. 1893
- Kudrun*. Bearbeitet von Paul Piier (Deutsche National-Litteratur, 6. Band, 1. Abteilung, Tokyo 1973
- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von K. Bartsch, hrsg. von H. de Boor, 20. Auflage, Wiesbaden 1972
- Das Nibelungenlied. Paralleldruck der Handschriften A, B und C nebst Lesarten der*

『クードルーン』に見られる縮約形 その2

- übrigen Handschriften*. Hrsg. von Michael Batts, Tübingen 1971
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutscher Text und Übertragung. Hrsg., übersetzt und mit einem Anhang versehen von Helmut Brackert, (Fischer Taschenbuch Nr. 6038. 6039), Frankfurt a. M. 1987.
- Das Nibelungenlied nach der Handschrift C*. Hrsg. von Ursula Hennig, Tübingen: Max Niemeyer Verlag 1977
- Ogino, Kurahei u. Shigeto, Minoru: *Wortindex zu „Der Wälsche Gast“ des Thomasin von Zirclaria*, erstellt am 19. 8. 1991 [im Manuskript]
- Paul, Hermann: *Mittelhochdeutsche Grammatik*, 19. Auflage bearbeitet von W. Mitzka., 2. Druck, Tübingen 1966; 20. Auflage von Hugo Moser und Ingeborg Schröbler, Tübingen 1969; 23. Auflage, neu bearbeitet von P. Wiehl und S. Grosse, Tübingen 1989
- Takeichi, Osamu: *Zum Gebrauch der kontrahierten Formen der Verben legen und ligen in der mittelhochdeutschen Epik – unter besonderer Berücksichtigung der gebundenen Dichtung* – . In: *Sprachwissenschaft* Bd. 30, Heft 3, 2005, S. 279-308
- Tervooren, Helmut: *Minimalmetrik zur Arbeit mit mittelhochdeutschen Texten*. Göppingen 1979
- Wolfram's von Eschenbach Parzival und Titurel*. 2 Teile, Hrsg. von E. Martin, Halle 1900 u. 1903, 2. Teil
- 武市修 『中世ドイツ叙事文学の表現形式』、近代文芸社、2006年

Zum Gebrauch der kontrahierten Formen weiterer Wörter in der Kudrun

— unter besonderer Berücksichtigung der Endreimdichtung —

Osamu TAKEICHI

Im letzten Artikel habe ich die kontrahierten Formen von *sagen* und *lâzen* in der Kudrun im Vergleich mit denen im Nibelungenlied betrachtet. Dabei hat sich ergeben, dass die zusammengezogenen und die normalen Formen von *sagen* in der Kudrun einerseits hundertprozentig zum Reimen, andererseits zum Rhythmisieren im Versinnern verwendet werden, während im Nibelungenlied außer allen 52 kontrahierten Belegen das normale Partizip Präteritum in vier von 12 Belegen zum Reimen dient. Was *lâzen* betrifft, so sind die normalen und gekürzten Formen umgekehrt im Nibelungenlied klar unterschiedlich benutzt: *lâzen* erscheint nämlich in allen Belegen im Versinnern und *lân* begegnet hauptsächlich am Versende: in 68 von 72 Belegen, während in der Kudrun außer allen gekürzten Belegen auch *lâzen* in zehn von 54 Belegen einen Reim bildet.

In der vorliegenden Arbeit werden weitere fünf Verben und das Substantiv *maget* unter dem gleichen Gesichtspunkt behandelt, und zwar im Vergleich nicht nur mit dem Nibelungenlied, sondern auch mit den anderen vier Werken.

Nach meinen früheren Recherchen erscheinen die kontrahierbaren Formen von *legen* in fünf anderen Werken überwiegend gekürzt. Vor allem treten sie im Tristan in 187 von 189 Belegen kontrahiert auf, und zwar das Partizip *geleit* in 109 von 111 Beispielen am Versende. In dieser Hinsicht verhält es sich bei der Kudrun ganz anders. Hier ist dieses Verb nur neunmal im Versinnern belegt und erscheint in seinen sechs kontrahierbaren Belegen (913,4. 1193,1. 1334,1. 1348,2. 1348,4. 1354,1) nie in

der kurzen Form.

Was *ligen* angeht, so zeigt die Kudrun fast die gleiche Verwendungsweise wie die anderen Werke: Hier findet man seine betreffenden Formen zehnmal in der 3. Pers. Sg. und neunmal davon in der kurzen Form *lît*, aber nur einmal im Reim. Die einzige normale Form wird wegen des Rhythmisierens folgendermaßen gewählt.

ein lant, daz liget wîten, daz heizet Hegelingen: (1231,3)

x | ǣ x | ǣ x | ˘|ǣ^| x | ǣ x | ǣ x|˘ |ǣ ^|

Bei den im Althochdeutschen zur dritten Klasse der schwachen Verben anhörenden Zeitwörtern sollte es eigentlich keine kontrahierten Formen geben. Aber mit der Verbreitung der Kontraktion benutzte man im österreichisch-bairischen Kulturkreis auch bei solchen Verben manchmal wegen der Metrik gekürzte Formen.

Bei *klagen* erscheinen kontrahierte Formen im Nibelungenlied im Partizip viermal als *gekleit* und außerdem sogar zu *ir* einmal als *kleit*. Im Wälschen Gast sind sie einmal im Partizip und dreimal in der 3. Pers. Sg. belegt, und zwar zweimal davon im Versinnern. In der Kudrun findet sich nur einmal die kontrahierte partizipiale Form *gekleit* am Versende. An allen anderen Stellen kommt *klagen* nie kontrahiert vor.

Im Wälschen Gast erscheint *schaden* in der 3. Pers. Sg. neben 8maligem *schadet* 6mal als *schât* im Versinnern und 5mal als *scheit* im Reim, obwohl diese Form im Wörterbuch nie angeführt ist. In der Kudrun ist eine gekürzte Form einmal im Konj. Prät. zu *ich* als *schatte* belegt, wie folgend:

ob ich in gerne schatte, wie möhte daz ergân? (W. Gast 837,2)

x | ǣ x | ǣ x | ˘|ǣ^| x | ǣ x | ǣ x|ǣ ^|

verdeit, die zusammengezogene Partizipialform von *verdagen*, ist im Nibelungenlied 6mal neben der zweimaligen normalen Form *verdaget* am

Versende belegt, während es in der Kudrun zweimal gleichfalls zum Reimen dient. Weder in den anderen drei untersuchten Epen noch in dem Lehrgedicht, in dem mehrere schwache Verben kontrahiert gebraucht werden, wird irgendeine kurze Form von *verdagen* gefunden. Im Tristan wird das Verb überhaupt nicht verwendet, sondern *verswîgen* ist in der gleichen Bedeutung 8mal belegt.

Anschließend betrachten wir das Substantiv *maget* und seine Nebenformen etwas ausführlicher. Im Nibelungenlied werden das Wort und dessen kontrahierte Form *meit* in Bezug auf den Reim klar unterschiedlich benutzt: Am Versende steht *maget* nur in drei von 29 Belegen, während *meit* in 55 von 56 Belegen zum Reimen dient. Um mit diesem Wort einen Reim zu bilden, spielt hier sonst noch dessen Diminutiv *magedîn* eine große Rolle: Es kommt nämlich in 18 von 19 Belegen am Versende vor.

Die Kudrun zeigt zwischen *maget* und *meit* fast die gleiche Tendenz wie das Nibelungenlied. Dort gibt es aber gar keinen Beleg, wo eine normale Form im Reim stünde. Dagegen treten die kurzen Formen nicht nur als *meit*, sondern auch als *meide* und *meiden* häufig am Versende auf, was zu ihrem Partnerwerk einen scharfen Kontrast bildet. Diminutive Formen von *maget* erscheinen meistens am Versende gleichfalls wie im Nibelungenlied als *magedîn* nicht nur doppelt so oft, sondern auch als *magetîn* dreimal, und *meidîn* als diminutive Form von *meit* ist sogar einmal im Reim belegt. *maget*, *meit*, *magetîn* usw. erscheinen in der Kudrun über doppelt so oft wie im Nibelungenlied.

Sowohl im Iwein wie im Tristan findet sich kein einziger Beleg der kontrahierten Form von *maget*. In diesen zwei Werken begegnet die normale Form verhältnismäßig häufig am Versende: jeweils in 25 von 36 Belegen und in 21 von 47 Belegen.

Der Parzival zeigt eine eigentümliche Verwendungsweise dieser Formen. Hier wird die Form ohne auslautendes *-e* fast in der Hälfte (43mal von 90 Belegen) reimbezüglich benutzt, während die volle Form *maget* in Bezug darauf sehr selten (zweimal von 42 Belegen) verwendet

wird. Als kontrahierte Formen von *maget* tritt in diesem Werk *meit* niemals auf, sondern *meide* in obliquen Kasus 40mal und der Dativ Plural *meiden* zweimal im Versinnern. Zwischen den normalen und kontrahierten Formen findet man das umgekehrte Verhältnis zur Kudrun.

Im Wälschen Gast finden wir merkwürdigerweise nicht nur keine kontrahierte Form von *maget*, sondern auch überhaupt keinen Beleg für dieses Wort, was zu den bisher nachgeprüften Verben ganz im umgekehrten Verhältnis steht. An diesem Unterschied kann man den Charakter der dichterischen Gattungen erkennen: In der Spruchdichtung analysiert der Dichter kritisch die damaligen sozialen Verhältnisse und weist die Geistlichen und Ritter auf ein religiös rechtes Leben hin. Dagegen steht in der Kudrun das brave Mädchen im Mittelpunkt der Handlung, und es werden das höfische Leben um sie, die Werbungen um sie, ihre Entführung durch Hartmuot, ihre Zurückgewinnung durch ihren Verlobten usw. dargestellt. Es ist interessant, dass den dichterischen Gattungen unterschiedliche Gebrauchsweisen der Wörter entnommen werden. Am Schluss des Textes steht eine Tabelle, die die Zahlen der verschiedenen Formen von *maget* in den sechs Werken zeigt.